

■振武軍、田無屯集～飯能戦争へ

〔飯能炎上/振武軍、江戸幕府に殉じる〕～慶応4（1868）年5月23日～

飯能戦争（はんのうせんそう）

【飯能戦争とは】

慶応4（1868）年5月23日に、彰義隊から分かれた振武軍を中心とする旧幕府方と明治新政府方との間で行われた戦闘をいいます。
戊辰戦争における地域戦のひとつと位置づけられています。

【振武軍の結成】

慶応4（1868）年、正月の烏羽伏見の戦いで敗れ、「朝敵」となって江戸に戻った徳川慶喜は、上野の寛永寺に謹慎しました。

一橋家の家臣を中心とする旧幕臣たちは、主君の汚名をそそごうと「彰義隊」を結成し、上野の山に入りました。

しかし彰義隊の頭取であった渋沢成一郎は、副頭取の天野八郎らと対立して上野を去り、五月初旬に田無村（西東京市）で「振武軍」を結成して、青柳街道沿いの西光寺（現・總持寺）を本営としました。

【振武軍、飯能に駐屯】

400人ほどとなった振武軍は、「徳川氏再興」の名目で、7つの改革組合村に対して呼び出しをかけ、およそ3600～3800両余の軍資金を調達して、箱根ヶ崎村へ移ります。

その後、明治新政府の攻撃を受けた彰義隊の援軍に江戸へ向かいましたが間に合わず、田無で上野戦争の残党などと合流して、5月18日に飯能のまちに入ります。

振武軍など旧幕府方は、能仁寺を本営に、智観寺・広渡寺・観音寺など6つの寺に駐屯しました。

【飯能のまちが戦場となる】⇐

一方、明治新政府は、福岡・久留米・大村・佐土原・岡山の5つの藩に旧幕府方の追討を命じ、これらの藩兵は5月21日に江戸を出立して田無に入ります。そこで、振武軍らが飯能にいるという情報を得ると、翌22日には扇町屋（人間市）へ進軍しました。⇐

そして、翌23日未明、俵井河原（狭山市）で旧幕府方と佐土原藩兵が遭遇して戦いの火蓋が切られました。ここで、旧幕府方を撃退した新政府方は、夜明けを待って飯能へ進撃を開始しました。⇐

午前6時頃には、飯能のまちも戦場となりました。⇐
この戦いの結果、200軒ほどの民家と能仁寺、智観寺など4つの寺が焼失し、飯能のまちを戦場とした戊辰戦争の地域戦のひとつ・飯能戦争は、わずか半日ほどで明治新政府方の勝利に終わりました。⇐

【振武軍の敗走】⇐

敗れた旧幕府方の兵士たちは散り散りになって逃れ、その中には渋沢栄一の縁者たちの姿もありました。⇐

そのうち、渋沢成一郎と尾高惇忠は上州・伊香保へ逃れ、草津に潜伏した後、江戸へと戻り、旧幕府海軍の榎本武揚に合流し、土方歳三や振武軍・彰義隊の残党らとともに、函館まで転戦しています。⇐

渋沢成一郎・尾高惇忠の二人とは別の道を行った渋沢平九郎は、秩父の山中を必死に敗走して、越生の黒山村（越生町黒山）に落ち延びましたが、広島藩・神機隊の監察・藤田高之の偵察部隊と遭遇し、交戦のうえ、自刃という最期を迎えました。⇐

渋沢栄一が帰国するのはこの約半年後のことです。このとき時代はすでに明治となっており、栄一の帰国も明治新政府の命によるものでした。

■ 展示資料紹介

・ 飯能市立博物館:提供資料

「飯能戦争広域図」5月23日の様相、伝渋沢成一郎・尾高惇忠・平九郎逃走図

・ 渋沢史料館所蔵:提供写真資料

渋沢平九郎肖像、渋沢平九郎自決之地、渋沢栄一、黒山に平九郎自決之地跡を弔う

・ 西東京市郷土資料室:撮影写真資料

振武軍之碑（唱義死節）、飯能の町中の戦場跡、能仁寺